

「HONTO」発行に寄せて

学校長 清水 博行

全国学校図書館協議会が、60年以上にわたって毎年、全国の小・中・高校の児童生徒の読書状況を調査しています。その「第61回学校読書調査」結果によれば、小学生の1ヶ月間の平均読書冊数は11.2冊、中学生は4.0冊、高校生は1.5冊と急減しています。また、高校生の半数以上(51.9%)が1ヶ月間に1冊の本も読まない、いわゆる不読者です。高校生が本を読まない理由として、「他にやりたいこと(部活動など)があって本を読む時間がない」とか「読まなくとも困らない」というものがあります。耐久生も同じような傾向にあります。

しかし、本当に読まなくても困らないのでしょうか。読むことのメリットはないのでしょうか？

「読むこと」は、文字を追い、語句の意味を理解することではないし、作者の言いたいことをなぞるだけでもありません。「読むこと」は、読み手(自分)が、自らの知識、経験、記憶、思い、感情、価値観、期待を総動員して自分なりの意味を見出す行為とも言えます。自分が感じたイメージをもとに、作者が何を言いたいのかと推測することが、「読むこと」で、書き手と読み手の共同作業とも言えます。

だから、「その人にとって読めることしか、読めない」し、「自分が読みたいと思うものしか読めない」ということになります。

特に、様々な情報が錯綜する今日、それを鵜呑みするのではなく、批判的(クリティカル)に読むという力が求められています。

「どういうバックグラウンド(思想や経験)を持っている人が書いたのか」。「どういう主張をしたくて、書いたのか」。「本に書かれていること以外に、このことに関しては、どのような考え方が成り立つのか」。「どこまでが事実で、どこからが作者の個人的見解なのか」。

これは紙に書かれた文字だけではなく、ネット情報(メールやブログ等も含む)、TV・新聞等のメディアから得る情報、風評(日常会話)に至るまで、応用の効く読み取り方と言えます。

この「HONTO」に納められたメッセージは、各先生が本から読み取ったものです。それは、もしかすると、本の作者が込めた思いと違ったとらえ方をしているかもしれません。でも、それはその先生の人となりから生まれた「読み」なのです。

あなたなら、同じ本を手にして、どう感じるでしょうか。「HONTO」を通じて、先生と対話する契機になればと期待します。